

平安京左京九条三坊九町・烏丸町遺跡発掘調査

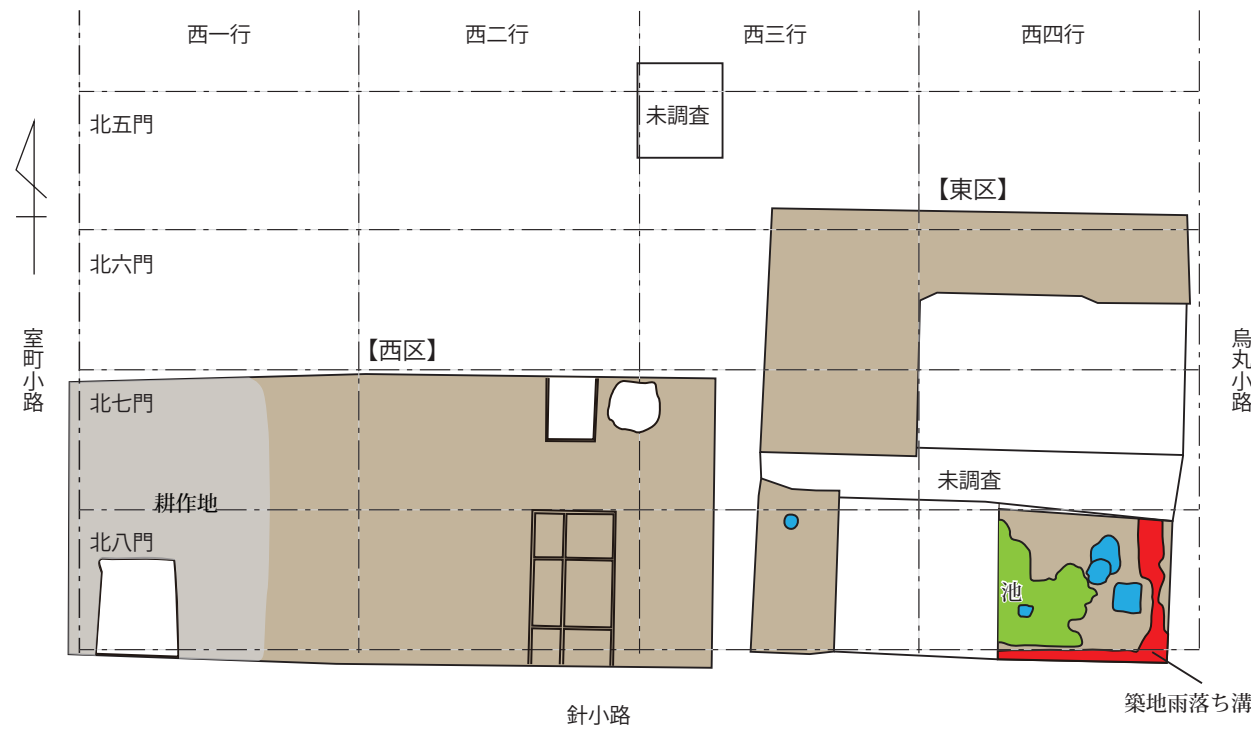
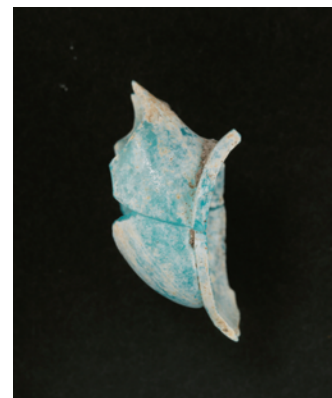


図6 14世紀の遺構 1：800

②平安時代後期のガラス製水滴出土

12世紀後半ごろの整地土から、ガラス製水滴の注口部分が出土しました。残長2.0cm、残幅1.5cmの鉛ガラス製で、同様の製品は奈良国立博物館所蔵伝比叡山出土品しか知られておらず、平安京内では初めての出土事例となります。平安時代の鉛ガラス製容器は中国製に限られており、本品も中国製と考えられます。非常に高価なものであり、この場所で使用されたものではなく、八条院領周辺の屋敷群へ供給される予定のものであったと考えられます。



まとめ

今回の調査では、八条院領周辺の館に付属する物流拠点もしくは宿所が発見されました。これは平安時代～鎌倉時代の京都が単一の都市ではなく、その内部に様々な拠点を持つ分節化された都市であったことを示します。

また、平安時代のガラス製水滴は平安京で初めての出土品であり、京都の豊かな消費生活を垣間見ることができます。



図7 整地土出土ガラス製水滴と推定復元図

『平安京左京九条三坊九町・烏丸町遺跡発掘調査 現地説明会資料』

発行・編集 公益財団法人 元興寺文化財研究所

発行日 平成29年10月21日

【主催】公益財団法人 元興寺文化財研究所

【協力】株式会社 松原興産 平安埋蔵文化財事務所株式会社
株式会社 文化財サービス

【指導】京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

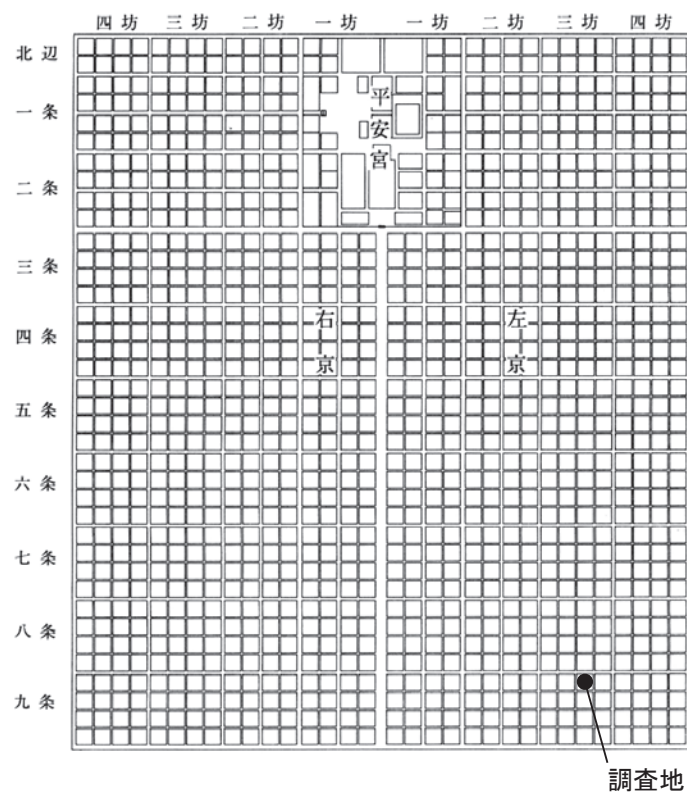


図1 平安京の条坊と調査の位置
(『平安京提要』より一部改変)

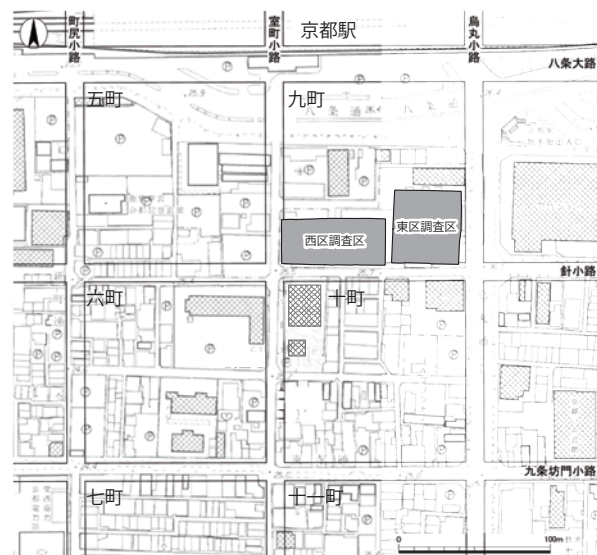


図2 調査地と周辺地図

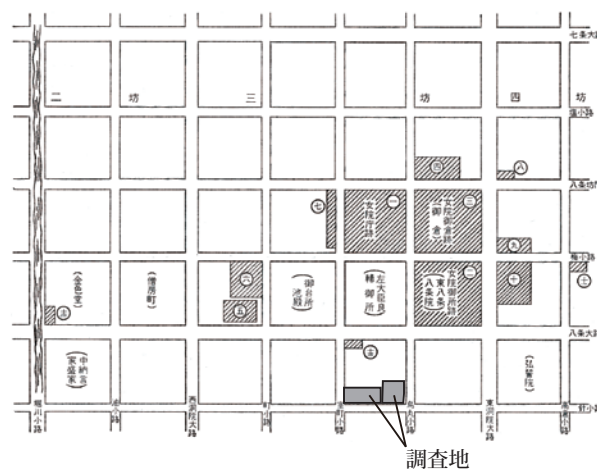


図3 八条院領の分布と調査地
(『京都・町の研究』より一部改変)

調査の概要

調査地は京都市南区東九条上殿田町 42 番地に該当し、2017 年 4 月 25 日から発掘調査を開始、同年 12 月 28 日に終了の予定です。発掘調査の総面積は 4,300 m²で、現在このうち 3,800 m²の調査を終了しました。

この場所は平安京の条坊名称では左京九条三坊九町に相当します。針小路を挟んで南に隣接する左京九条三坊十町の発掘調査では、平安時代前期の池と、薬の製作や配布に関わった施薬院に関連する木簡が見つかっています。

調査の成果

今回の発掘調査では主に以下のことが分かりました。

①八条院町周辺の館群にかかわる拠点的な場所であることが判明。

調査地北側の京都駅付近は、平安時代後期に鳥羽院皇女八条院暲子内親王をはじめとする貴族の屋敷地となり、内親王没後の鎌倉時代には職人町となります。

当地は 9 世紀中ごろに整地が行われ、小規模な建物が営まれますが、短期間で消滅します。そののち、12 世紀後半ごろに建物群が再び出現、13 世紀に遺構数が最大となることが判明しました。その後 14 世紀には、南東部に屋敷がつくられるほかは衰退し、農地へと変わります。12 世紀後半～ 13 世紀の遺構からは畿内各地の土器だけでなく、播磨や吉備、東海地方など遠方の土器類が多数出土したことから、各地の貢納品を巨大な消費地であった八条院領周辺の館群に供給する物流拠点や、地方出身関係者の宿所などの可能性が考えられます。

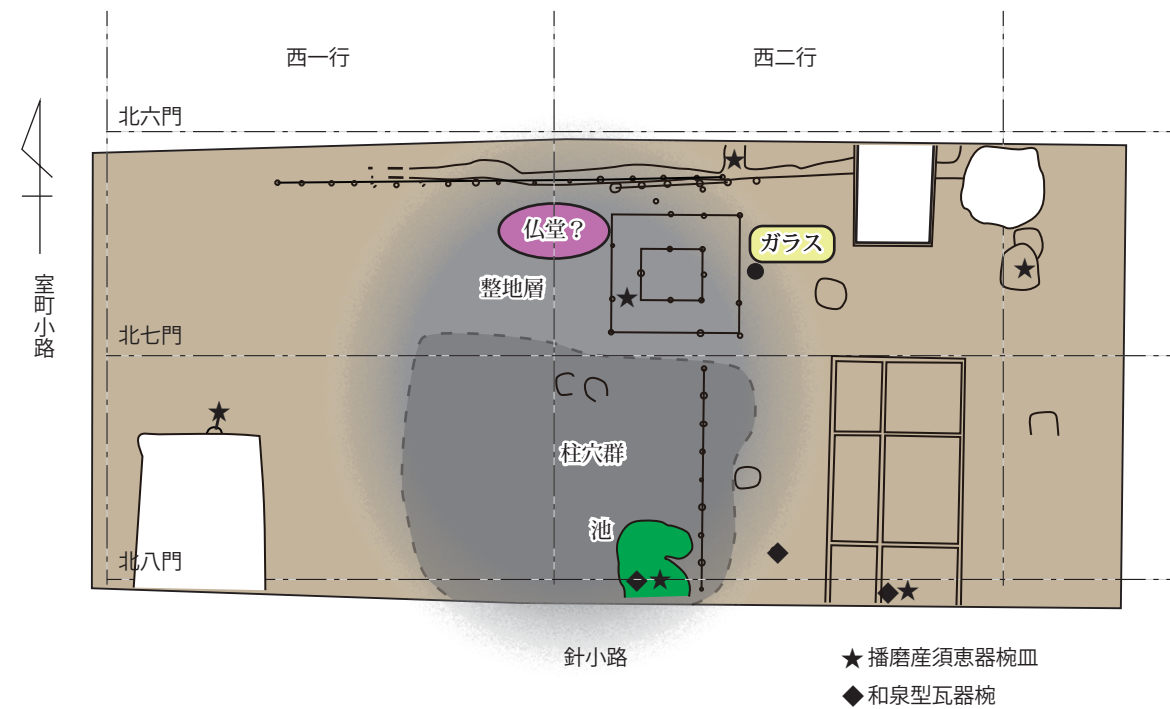


図4 12 世紀後半～ 13 世紀初頭の遺構（西区） 1：500

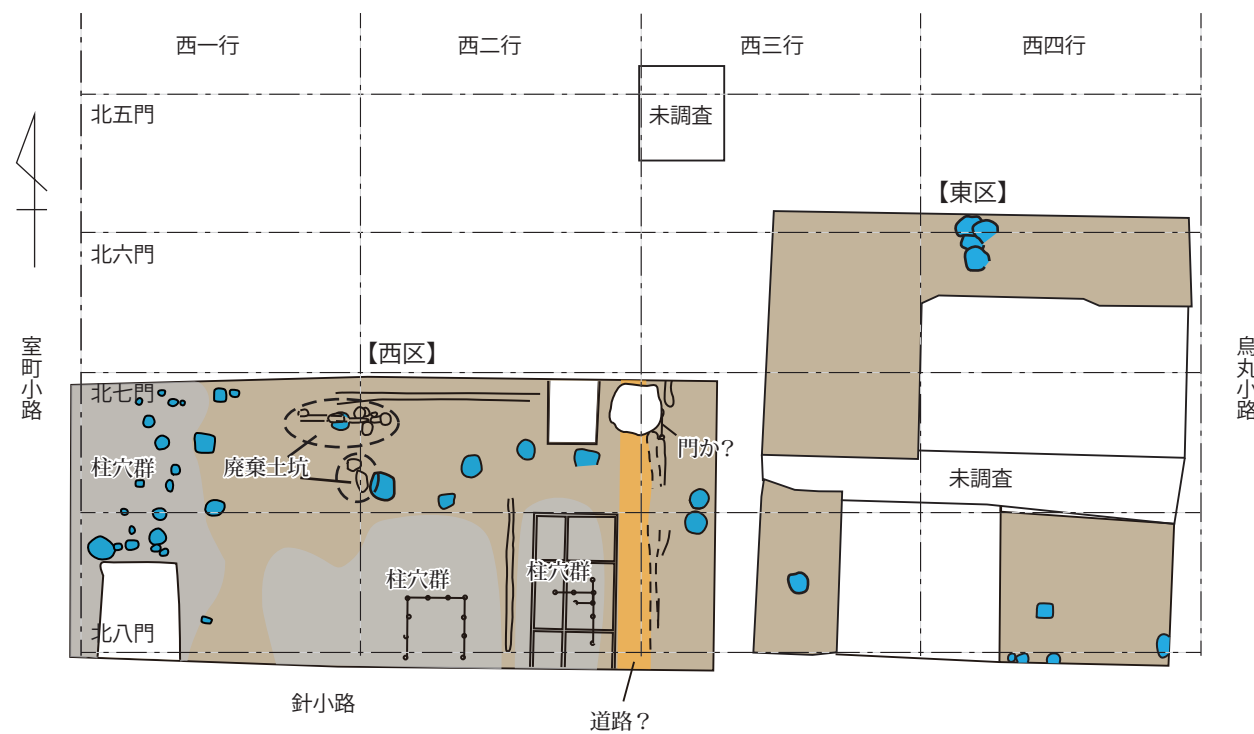


図5 13 世紀前半～ 13 世紀後半の遺構 1：800